

「道徳主義をこえて」(2)

菊田佳行

「御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。御言葉を聞くだけで行わない者がいれば、その人は生まれつきの顔を鏡に映して眺める人に似ています。鏡に映った自分の姿を眺めても、立ち去ると、それがどのようなであったか、すぐに忘れてしまいます。しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ、これを守る人は、聞いて忘れてしまう人ではなく、行う人です。このような人は、その行いによって幸せになります。」 (ヤコブ1:22-25)

前回の号で (NO.618)、明治以来の日本のキリスト教は、厳格な道徳主義的な傾向が強く根付いてしまっているという話をさせて頂きました。今回は、そのような歴史的なキリスト教の変遷によって形作られた産物と、聖書そのもののメッセージを比較したいと思います。

聖書のメッセージの中で、中心的な所はどこかといえば、やはり、イエス・キリストということになります。聖書は、キリスト教信仰において、神の御心を現している書物であるわけですが、その最も神の意志が明確に示されているのが、新約聖書に記されている「イエス」という人格ということになります。つまり、およそ2千年前にパレスチナのナザレという村に現れたイエスという一人の人格を通して、私たちは最も神の意志を知ることが出来ると信じているのがキリスト教だということです。よくその子を見れば、親がどのような人物かわかると言いますが、まさに、ナザレのイエスを見れば、神がどのような存在なのかが分かるというのが、キリスト教の立場であります。

ですから、もしイエスが、厳格な道徳主義的な教えを人々に説き、そして自ら倫理的な清さを何よりも大切にしていたというのであれば、そのままそれが神の姿を現していることになります。しかし、実際の新約聖書、特に福音書というイエスの生涯を詳細に記した書物には、それとは正反対のイエスの姿が示されています。イエスは、「見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ。」(マタイ11:19)と言って、イエスを拒絶し、排除しようとした人々によって擲擲されてきました。そして実は、このイエスを拒絶する人々こそ、厳格な道徳主義的姿勢によって、イエスを含めた他者を裁いていたのです。ある時イエスが、当時罪人と呼ばれて、倫理的な清い行動をすることが出来ずに、世間から冷たい視線で見られていた人々と共に、宴会に列席したことがありました。その時、これらのイエスの反対者である道徳主義的なファリサイ派の律法学者という人々が、罪人と食事の席を共にするイエスをなんてふしだらなんだと非難します。イエスは、神の意志を人々に伝える当時の教師として考えられていました。ですから、そのような教師が神の意志を踏みにじる罪人と食事を取るなんて、なんたることかというわけです。しかし、イエスからすれば、神の意志とはその様などころにはありませんでした。イエスは、たとえ罪人と呼ばれ、人々から冷たい視線で下げずまれていた人であっても、その人の弱さや欠点、罪を裁くことなく、まず、これらの人々を受け入れられたのです。そのように、その人が抱える罪と呼ばれる人間の弱さを、責めたり、断罪するのではなく、そのような人間のもろさを一種の病気として捉え、治療が必要な

病人として受け入れたのがイエスだったのです（マルコ2：13－17）。聖書では、このイエスの姿勢を、「憐れみ」を最優先するあり方として、特に強調しています。つまり、厳格な道德主義的な姿勢を一番に優先することが神の意志なのではなく、相手の人の罪の背後に隠れている、大いなる苦しみや悲しみの蓄積こそ、何よいてもまず、心に写し取るという「憐れみ」を優先することが、イエスを通して現された神の意志だということです（マタイ9：13、12：7参照）。

こうして見てみますと、明治以来の日本に定着してしまったキリスト教の道德主義的な傾向は、神の意思の現れであるイエス・キリストとは、全く正反対の立場であることがよく分かります。イエスに反対し、イエスを死に追いつめた中心的な人々であるファリサイ派の律法学者が取った姿勢が、実は、いつのまにかキリスト教の姿としてすり替わってしまったというのが、現状だということです。そのような、イエス・キリストによって示された神の意志と正反対の方向を向いて聖書を読んでいたのでは、やはり、誤った解釈をすることになってしまうでしょう。

今回取り上げた聖書箇所では（ヤコブ1：22－25）、「御言葉を行う人になりなさい」と、言われていました。歪んでしまったキリスト教観でこの言葉を聞けば、当然、倫理的に正しい行動を要求している言葉として聞いてしまうでしょう。しかし、実際は、先ほど挙げた、神の意志の中心としてのイエス・キリストによって示された「憐れみ」の最優先という視点においてこの言葉を聞けば、自ずと違った受け取り方が出来ると思います。「御言葉を行う人になりなさい。」の、御言葉とは、まさに、「人には憐れみ深くありなさい」という御言葉だということです。この言葉は、厳格な道德主義的な姿勢を自他に要求し、他者をその基準によって裁くというあり方をしなさいと言っているのではないのです。そうではなく、弱さや罪を抱える人々を、まず受け入れられたイエス・キリストの慈しみの姿に、自分の向いている方向を合わせなさいということです。そしてさらに、それをしなさいという時、そこには、それをするかどうかで、新たな裁きの基準を設けるといったものではありません。つまり、今度は憐れみの最優先をしないのであれば、神の救いから排除するといった基準のことです。そうではなく、ここで言われていることは、御言葉を行う目的は、**忘れないようにするためだ**ということです。この点を、次回の号で、さらに詳しく見て行きたいと思います。